

杉並木

巡礼者が日光山の神社仏閣に向かう際に利用した3つの旧街道には、12,000本以上の杉並木がある。そのうちの2本は南からの参道で、今市町で一本道になっている。3本目は日光と福島県会津を北東に結ぶ道である。徳川三代将軍・徳川家光（1604～1651）の下で日光の建設を監督した松平正綱（1576～1648）が植樹した。1625年から20年間で5万本以上の植樹が行われましたが、自然災害や老朽化で多くの樹木が失われている。杉並木は、35キロの長さを合わせたもので、世界最長の並木道です。

神橋（重要文化財）

神橋は、「神聖な橋」という意味で、日光山の象徴的な入口である。伝説によると、766年に僧侶であり山岳修験者であった勝道上人（735～817）が男体山に登り、山頂で修行をした際に、荒れ狂う大谷川を渡ることができなかった。その時、智慧経の守護者であり、観音菩薩の現れである深沙王が彼の祈りに応え、二匹の蛇を抱えて川の北側に現れた。その蛇と一緒に橋を作り、正道たちが川を渡るのに使ったといわれている。

元々の橋は、1636年に架けられたもので、幕府や宮廷の役人、あるいは宗教的な行列の際にのみ使用されていた。橋は1902年の足尾台風で流された後、1904年に再建された。1973年から一般公開されている。